

総論

科学技術とどのように向き合うか

1. わたしたちのくらしと科学技術—その発展過程と向き合い方の変遷—
佐藤 靖

2. 科学技術と共存していくために—「身近なもの」から「深く」考える
藤原 辰史

現代社会において、科学技術の成果は広く社会に浸透し、人々の生活に影響を与えている。例えば、バイオテクノロジーのような生物学の知見をもとにして培われてきた科学技術は、醸造や発酵の分野はもちろん、農作物の品種改良、創薬・再生医学など多岐に渡って活用されている。

こうした科学技術は人類の未来に資するものであるという考えのもとで開発されてきた一方、副作用として環境問題や戦争などの数多くの問題をもたらしてきた。科学技術が及ぼす影響は、社会や人々の生活のあらゆる場面で垣間見られ、環境の持続可能性や倫理・尊厳などの問題に密接に関わっている。

しかしながら、日々の生活の中でこうした科学技術について考える機会や実感する機会は多いとは言い難い。科学技術のあり方や科学技術の研究開発のされ方については、科学技術に関係する立場の人々と、科学技術を享受する立場の人々との双方がコミュニケーションを取って、「多様な立場」から科学技術についてま

なごしを向けていくことが重要であると考えられる。

科学技術に「絶対」はなく、今、安全であると判断される技術でも、時を経て、安全ではなかったとわかることや、科学技術が開発された当初とは「思いもよらない」(想定外の)方向へと進むことで、甚大な被害をもたらすことがある。そのため、科学技術の進歩には「できるだけ多くの人々」が自身の「生活に関わりあるもの」として捉えられるように、オープンにして話し合える場を整えていくことが肝要であると考えられる。

総論はこうした科学技術との向き合い方について考える企画として、佐藤靖氏には科学技術の今日までの発展過程について、また藤原辰史氏には科学技術がこれまでとこれからの食のあり方にどのように関わるのかということについて、示唆を富む内容を述べて頂いた。本号を通じて進歩する科学技術と、生活との接点について見つめ直してもらうきっかけになれば幸いである。

(本研究所研究員 片上 敏喜)